都市空間の新しい公共性

一静岡駅南口整備計画—

今日まで駅には「どれだけ多くの人や物資をいかに正確に輸送できるか」という役割が重要視され、駅を中心に都市は経済的発展を遂げてきました。 平均乗車人数 59,500 人 / 日を誇る JR 静岡駅もその例外ではなく、中心市街地における交通結節点として静岡市の経済活動の中枢を担っています。 一方でインターネットの急速な普及は場所や距離という概念を一気に飛び越え、現地を訪れる事無く会話やショッピングを気軽に楽しめるものにしました。 しかし、同時に度重なる震災によって顔と顔を合わせたコミュニケーションの重要性も改めて再認識されはじめています。

本計画は静岡駅南口に図書館を核とした駅前広場を整備し、駅を単なる交通結節点を越えたコミュニケーションの結節点へと発展させるものです。



計画地について

-駅と鉄道線路がもたらしたもの-

都市の経済的発展の一躍を担ってきた駅と鉄道線路ですが、それが故に東西あるいは南北に連続性の欠いた都市構造が全国的に数多くみられます。 静岡市中心市街地においても JR 静岡駅と鉄道線路を境に南北で全く異なる特徴・街並みとなっています。

歴史ある呉服町・七間町等を中心とした商業施設や日本の大動脈である国道 1 号線等の幹線道路により常に活気溢れる駅北側ばかりが注目されがちですが この鉄道線路によって駅南側の小学校や緑豊かな公園、そしてそれを中心に広がる住宅地の静かで落ち着いた環境が今日まで守られてきたともいえます。 JR 静岡駅は南北が共有する賑わいの核です。

これを静かで落ち着いた周辺環境の中にどう活かすかが静岡駅南口整備計画の鍵であると考えました。

駅に面した付加価値の高いこのエリアには、





計画地を南東より見る

駅×図書館

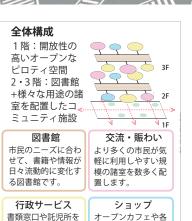
一知と賑わいのステーション-

静岡駅南口に交通基盤の再整備と共に中心市街地活性化の中核としての役割を担う公共施設を計画します。 「多くの人・もの・情報との出会いが溢れる知と賑わいのステーション」をコンセプトとし、

図書館を中心にホールやギャラリー、子育て支援等の様々な機能を有します。

静岡駅を中心としたこの場所に様々な世代・立場・目的を持った人々が集い、交流し、活動する事によってまち全体にその賑わいと活気が波及していきます。





とって利便性の高い

行政サービスの提供

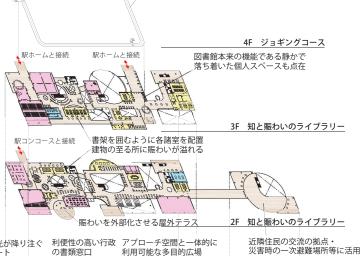
を行います。

種ショップには静岡

ならではの素材や技

術を用いた商品が数

多く並びます。



最上部にジョギングコースを設置 駅ホームからも人の賑わいが見える



上部から光が降り注ぐ 利便性の高い行政 アプローチ空間と一体的に 南口の観光の拠点として機能 ライトコート の書類窓口 利用可能な多目的広場

静岡の伝統工芸をモチーフ

とした木組みの大屋根

視線の交錯を生む吹抜 3層吹抜の開放的な多目的広場

建物内に自然光も取り込む 年中イベントの開催が可能

街並みに配慮した高さを抑えた計画 市民の活動を外部に広げる屋外テラス 既存静岡駅と高さを合わせ周辺への圧迫感を軽減 活動が外部から見えることで賑わいを創出

ピロティ形式の半屋外空間

Later 多目的広場

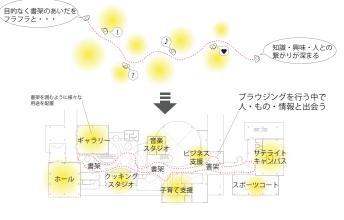
一般送迎車

出会いをブラウジングする

この『図書館』にはたくさんの人・もの・情報が溢れ、あらゆる場所で 出会いが生まれます。

ブラウジングによって書架から書架へと渡り歩きながら、自分の知識を 深めたり、新たな興味に気づいたり、様々なコミュニケーションが 生まれる場所となります。

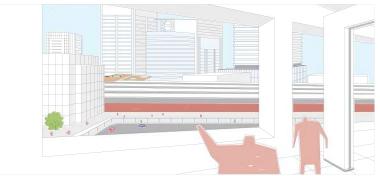




まちをブラウジングする

この『図書館』はあくまで「出会い」の場であり、より深く専門的 な知識や実体験をしたいという要求には静岡市に点在する 専門施設全体で対応します。

逆に自分が専門施設で発見した事を誰かと共有することもあります。 市民の活動・欲求によってまちが成長・成熟していくのです。





- 専門施設間のブラウジングを行う中で さらに知識が深まっていく

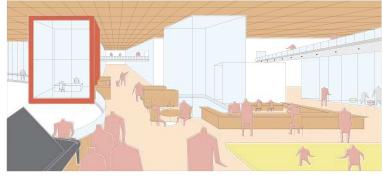
専門施設も常に新しい情報・欲求を つかむことでまち全体が成長・成熟する

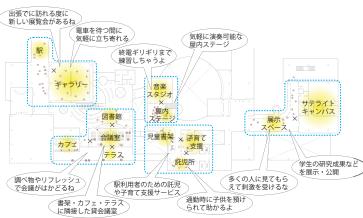
図書館で人・もの・情報と出会う

複合化・多機能化による相乗効果

様々な用途を近接に配置することは単なる出会いだけでなく、 単一用途を越えた相乗効果を生み出します。

これまでのような「どこかの施設に行って何かをする」というような 完結型の公共施設では体験できないような新しい コラボレーション型コミュニケーションが期待できます。

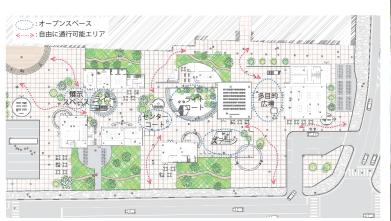




オープンであること・フラットであること

階は市民に開放されたオープンかつフラットな広場です。 駅南口周辺ならではの静かな環境のおかげで、人々はそれぞれゆったり とした思い思いの過ごし方をすることができます。 大きな吹抜から光や風が通り抜けるこの場所は常に人々で賑わい かつての町家の通り庭のような気軽に立ち寄れる空間となります。





公共空間を設計するということ

かつての地域社会の中には通り庭や縁側・軒下といった半公共的な空間があり、自然発生的なコミュニティの場となっていました。 これらの「曖昧な中間領域」が私有地と道路等の公有地との間に存在することでまちの賑わいが表出し、その土地ならではの風景をつくってきたのです。 しかし、幅のあったその領域は時が経つにつれて明確な線に集約され、今ではほとんど消えつつあります。

> この図書館でかつての通り庭を1階のオープンスペースに、緑側・軒下を2・3階の外部デッキに再生させます。 人が気軽に集まり、肩を並べて語り合い、一つ屋根の下でともに過ごす。



図と地: まちの視点を変えてみる









日本的なまちづくりにおいて大切な事は「どれだけ素晴らしい建物を建て るか」や「どれだけ便利な道路や線路を作るか」という単体毎の視点ではなく、 中間領域をどれだけ豊かなものに出来るかという視点から建物や道路等の整 備を行うことであると考えます。

